
宇宙のステルヴィアの二期を考えてみた

九龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙のステルヴィアの二期を考えてみた

【Nコード】

N7561S

【作者名】

九龍

【あらすじ】

この小説は宇宙のステルヴィアと星の軌跡を基に二期はこうであらうと考えた物です

本科生になっても相変わらずな真也達

工事中のステルヴィアに新入生を向かえ新たな風が吹く

第一話　新入生歓迎会（前書き）

タイトルはなんか思い付かなくてこのような形になってしまいました
それではお楽しみ頂けたらと思います

第一話　新入生歓迎会

工事中のステルヴィアに新しい風が吹く
その風は何処まで進むのか
その風の行方は

side 真也

今は新入生歓迎会の中で
歓迎飛行を終え会場に戻り新入生達の様子は活気に溢れている
光太はミッションで出払っている・・・なんとも運の無い事だ
折角の新入生歓迎会の日までミッションとは

「歓迎飛行御疲れ様」

不意に後ろから声を掛けられた
振り返り声の主を見るとそこには俺の大切な彼女がいた

「ありがとう初佳、教官の目から見て今年の新入生はどうかな？」

「そうね・・・まだなんとも言えないわね、書類は見たけど地上と宇宙は別だもの」

まあ書類で全てが分れば苦労しないしな

「まあ俺としては片瀬さんの弟が気になるが・・・それは今後の楽しみって所か」

「そうね・・・まずは最初の通過儀礼がまっているしね」

通過儀礼か、言いて妙だな・・・予科生が始めて宇宙を体験する地上でのシュミレーターとは段違いだからな

「初佳の講義は何時からだっけ」

俺がそう聞くと端末を取り出し予定を確認する初佳

「予科生の宇宙演習からだから10日後ね、そうは言っても書類とかで休みはありませんけど」

と片目を瞑って拗ねたように言う

「さて、そんな初佳に・・・今夜の夕食は一緒にどうかないか」

俺は何かと理由を付けて初佳をデートに誘う

「それならレイラ教官お勧めの場所にしましょ、話で聞く限りでは雰囲気も良いみたいだし」

レイラ教官のお勧めの場所ね・・・気になるし行ってみてもいいか

「それじゃそこにしよう」

初佳と話している最中に咳払いが聞こえた
振り返るとそこにはレイラ教官の姿があった

「狛江、町田・・・付き合っているにせよ仮にも講師と生徒なんだから羽目を外しすぎないようにな」

と釘を刺さしそのままレイラ教官は歩いていった

「それじゃ20時くらいに、カフェエリアでいいかな」

「ええ、そのくらいに・・・また後で」

初佳との会話を終え見知った顔のところへ足を運んだ

s i d e o u t

s i d e 志麻

挨拶を終えアリサと一緒にアリサの妹のミアちゃんと真人を探していた

「あ！姉ちゃん」「あ！お姉ちゃん」

声のする方を向くと目的の二人が一緒にいた話を聞くとフジヤマで知り合ったみたい

その話で私はアリサとの出会いみたいだなんて思っていた

「なんだか私としーぽんの出会いみたいね」

アリスも同じ様に感じていたみたい

「本当にね、なんだか懐かしいなあ」

あれから色々あったなあグレートミッションやウルティマ、そして
ジエネシスミッション

去年は何事も無く終わったし今年もきつと大丈夫だよな

「そついえば光太さんは？」

真人がそう聞いてくる

「光太くんはミッション中、だから今ステルヴィアにいないんだ」

でも離れていても大丈夫、

「なにやら楽しそうに話しているな」

と不意に声を掛けられた

「あ！歓迎飛行の時の」

声の主を確かめると真也くんがそこにいた

「君は・・・たしか片瀬さんの弟の、隣の君は？」

真也くん、真人とは一回しか会ってないのに良く覚えているなあ

「はい、片瀬 真人です、よろしくお願いします狛江先輩」

「え！？あの、ミア・グレンノースです！歓迎飛行かつこよかったです！」

二人が自己紹介をしていてミアちゃんの苗字を聞いた時に真也くんは考えるような顔をしていた

「グレンノース・・・と言うと」

「そうです！アリサちゃんの妹です！可愛いでしょ！・・・それとミア、真也は止めときなよ、振られるのが落ちだから」

とアリサは真也くんの言葉を肯定するように言う、ついでにミアちゃんをからかう

「付き合うなら隣にいる真人君とか・・・そうなるとしーぽんは大親友を通り越して・・・親戚！？」

「すみません、僕には心に決めた人が」

と真人もアリサの冗談に乗ったみたい

「もう！お姉ちゃん！真人くんまで」

ミアちゃんはなんだかんだ言ってもアリサの事が好きなんだなあとそのやり取りを見ていてそう思った

「さて、それは置いといて・・・二人ともパイロット科志望なのか

な」

と真也くんは二人に質問した

「僕はパイロット科志望です、姉の飛んでいる所を見て自分も飛びたいって思ってた」

「私は・・・一応パイロット科です、でもお姉ちゃんのいる整備科も興味があります！」

私は真人の言葉で少し恥ずかしくなりながらも二人ともパイロット科志望で嬉しい気持ちもある

真人達と話していたらあつと言う間に終わりの時間がやってきた

「もう時間だな」

真也くんの一言でアリサが叫ぶ

「えー！もう時間！？話たりない！」

「そう言うな、アリサと片瀬さんは同室なんだから後で二人を呼んで話せば良いだろう」

「それもそっか！じゃあミア後で私達の部屋に集合ね」

「で、でもお姉ちゃん、私お姉ちゃんの部屋知らないよ」

「大丈夫！後で端末に送っておくから！」

アリサは本当にまだ話足りないらしい
それでもその光景は微笑ましいものだった

「姉妹和気藹々もいいが最後に一言、二人とも・・・ようこそステルヴィアに」

真也くんの言葉が終わったと同時に新入生歓迎会の終了を告げる放送が流れた

s i d e o u t

新入生という新たな風がステルヴィアに吹き
基の状態に戻ろうとしていた
そして新入生には初めての宇宙
それぞれの行く道は

第一話く新入生歓迎会く（後書き）

御読み頂ありがとうございます

こつ半オリジナル的な物を執筆するのは初めての試みで不安でいっぱいですが

それでもお楽しみ頂けた幸いです

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

第二話　励む者、見守る者

（前書き）

0 時前に投稿したはずなのに投稿できていなかった畠・・・
気が付いて急いで投稿しました

それではお楽しみ頂けたらと思います

第二話　励む者、見守る者

新入生歓迎会から一週間

予科生達もステルヴィアに慣れてきた頃
また新たに宇宙を知る事となる

side 真也

新入生歓迎会から一週間

予科生の体験講義が終わり、予科生は初めて宇宙演習を控えていた

そんな中俺は今日の講義を終え自室に帰ろうとしていた

講義室を出て歩いていると後ろから声を掛けられた

「狛江、ちょっといいか」

振り返りその主を確認する

「レイラ教官、どうかしましたか」

俺は声を掛けた理由を聞いた

「いやなに・・・明日、予科の宇宙演習があるのだがサポート約を頼みたいと思ってるな」

そういえば予科生の時、初佳が片瀬さんのピアノ力を止めようとしていたつけ、俺も似たような事をすれば良いのか・・・

でもコレはいい機会だ、なんだかんだと言って今年の予科生には興味がある・・・明日の講義は午前のみ、被らなければ是非ともその役を受けたいな

「安心しろ、演習は午後4～6限だ・・・お前は確か明日の講義は午前だけだったはずだ、それにサポート役でも単位は出す」

俺が少し講義の事を考えていると後を押すように言う
しかしそういう事なら是非参加させて貰おう

「そういう事でしたら是非とも参加したいです」

俺はレイラ教官に参加の意を示した

「そうか！なら明日、Bブロックエリアに13時だ・・・機体はストラーダで頼む、遅れるなよ」

「分かりました、13時にBブロックですね」

「そうだ、よろしく頼むぞ」

「はい、では失礼します」

そう言つて俺は自室を目指した

俺は部屋に戻りコーヒーを飲みながら明日の演習の事を考えていた

予科生に片瀬さんの弟が居るが・・・まさか最初の片瀬さんの様に飛ぶのか・・・

しかし、片瀬さんと違ってしっかりした印象を持つから・・・なんとも微妙な線だな

まあ何にせよ、明日になれば分る事だ

s i d e o u t

s i d e 初佳

今日は新入生達の宇宙演習
今は教官室でレイラ教官と打ち合わせの最中

「今年度初の宇宙演習だが・・・片瀬の弟が居るのだが・・・」

レイラ教官は入学当初の片瀬さんに手を焼いていた様だから少し心配なんでしょうけど

「地上でのシュミレータではランクA、優秀な部類だと思うのですが」

そうは言っても地上と宇宙では全く違う・・・地上でのシュミレーター情報は余りあてにならない

「・・・片瀬も地上でのシュミレータはソレに近い数値だった」

そう言われてしまうと何も返せ無い

資料をみて注意が必要そうな子を探す

目に留まったのはミア・グレンノース

彼女は身体の4割が機械による補助を受けている

適正に通るのだから問題は無いと思うけど一応レイラ教官に話してみる

「レイラ教官、この子は・・・」

そう言って資料を渡す

「ミア・グレンノースか・・・事故により身体の4割を機械による補助を受けている子だ問題は無いはずだ・・・ソレより目を向けなきゃならないのはこの子だ」

そう言ってレイラ教官は私に資料を渡す

リリー・ブッフホルン

適正はAランク、運動能力も高く成績優秀
何処にも悪い所は無いのに何故・・・

「こういった成績優秀者は自分の力量を過信している場合が多い、過信や慢心は事故の元だ・・・そしてこういう子は壁にぶつかった時に折れやすい」

成る程・・・そういった子を見極めるのも教官の仕事・・・まだまだ学ぶ事が多いわ

「そうですね、気をつけて見てあげないと行けませんね」

「そうだな、とりあえず今日の演習は予科生を宇宙とビアンカに馴らせる方向で行こうと思う・・・来週の演習から特定のコースは走らせ状態をみてスラロームに移る」

「分かりました・・・それではその様に演習予定を作りますね」

レイラ教官の言葉を基に演習予定を組む

「ああ頼む、それと今回のサポート役だが狛江に頼んでおいた・・・ストラーダなら万が一片瀬のように飛行プログラムを書き換えられなくてもアンカーワイヤーで押さえつけられるからな」

よほど片瀬さんの件が堪えているようだ

真也が居れば心強いけど、真也に格好悪い所を見せたく無いし教官として甘い気持ちは抑えなきゃ

そして3限終了のチャイムが鳴る

「よし、話はこころ辺にしておいて昼食にするか」

「はい、それでは4限目に」

さて、昼食はなににしようかしら

side out

side ミア・グレンノース

「君達の宇宙演習を担当するレイラ・バルトだ、そして」

「同じく宇宙演習を担当する町田・初佳です」

うわーちょっと怖そうな先生と綺麗な先生だなあ

「さて、いよいよ予科生初めての宇宙演習だ・・・諸君は地上でのシュミレータ経験は十分に有ると思うが、オーバースマシンの操縦は従来のそれとは、かなり異なるものだ・・・パイロットスーツもこれまた異なる、まずはマニュアルを熟読し、10分後格納庫に集合!」

その言葉に私は大きく返事をする

「はい!」

そして更衣室に向かった

とうとう初めて宇宙にです

うゝ緊張するなあ・・・あ!早くパイロットスーツに着替えなきゃ

急いで私は更衣室に入った

そこで周りを見るとバーンやドーンって感じで皆凄いです・・・私はペターって感じですが
ってそんな事考えている場合じゃなかった

急いで制服を脱いでインナーを着てパイロットスーツを着込む

そして急いで格納庫に向かった

最後に着いた私は急いで列に加わる

「よし、皆ちゃんと着てきたな・・・まずは、スーツの機能性を実
感して貰う・・・格納庫を大きく回って10週！」

「「「はい！」「」」

返事をした後走りだす

うう・・・私走るのあんまり得意じゃ無いのに・・・

「各自、自分の脈拍と血圧をチェックして・・・どんな状況でも
自分の状態を常に把握しておきなさい」

そう言われ脈拍と血圧を確認した
ちよつと高め・・・走ってるからコレくらいだよな
でも前の男子は喋りながら走るとか余裕あるなあ

「コラ！真面目に走らないか！！」

やっぱりレイラ先生は怖いです！喋りながら話している男子にスクー
ターに乗りながら蹴っていました！

そうしてレイラ先生の恐怖に駆り立てられ10週を終え、今ビアン
カに乗っています

「本来なら0Gで搭乗するがしばらくはG有りで行う……まずはシート感触を実感しなさい……セット」

えつとセットって言えばいいのかな

「せ、セット」

コクピットが閉じ色々なデータが表示される

《認証完了、ミア・グレンノース》

『どうだ、各人固定できたか？君達のIDはそれぞれのビアンカに登録された、これからそいつらは君達の相棒という訳だ……身長、体重、脈拍、血圧、その他の各種データはビアンカを通じて管制センターでモニタリングされている……最初は出力もバッテリーも抑え目にしてある……各所のチェック、後に待機』

えつと……なれるまでは色々抑えられてるって事だよね

『これより格納庫並びにコクピットは0Gになる、スタンディングポジションはその際に調整するように……重力制御オフ！』

え！行き成り0G？わわ！身体が浮く
えつと調節しなきゃ

アナウンスが流れる

『これよりB-1クラスオーバビスマシンビアンカ発進します……』

・・・エア放、ゲートが開きます』

『第1団、テイクオフ』

第一弾って私だっけ？

って！落ちてる！

ちょっと悲鳴を上げちゃったけど皆同じだよな！

『全員発進したな・・・今日君達のサポートをしてくれる狛江だ、頼れる先輩だから存分に頼るよう』

『始めまして、狛江 真也です、レイラ教官は頼れる先輩と称して頂いたので期待に応えられるよう頑張るのでよろしくお願いします』

狛江先輩だ！あの機体は歓迎飛行でも見たストラーダだ

『それでは、私のビアンカを目印に集合』

えーっとレイラ先生のビアンカは・・・あそこだ、よし頑張るぞ

《ドン！！》

行き成り後ろから衝撃を受け出力を最大にしてしまった

縦に周り出すビアンカの制御が出来ずくると周り続けている

俺は自己紹介を終えレイラ教官の指示を待つ

『狛江、町田はこのポイントで待機してくれ』

その言葉と共にデータが転送される

レイラ教官のビアンカ頭に三角形を描く配置だ

『もし私の遠隔制御が間に合わない場合は二人に止めて貰いたい』

遠隔制御か・・・最大制御数は何機なんだろう

「レイラ教官、遠隔制御の最大数と有効範囲はどの程度ですか」

『最大15機と範囲は15km、私のビアンカと狛江のストライダーだ』

成る程、余程の事が無い限り掌握できる訳か

『それでは演習を始める・・・何時でも動ける様にな』

レイラ教官にそう言われ俺はアンカーワイヤーと作業用アームの口ツクを解除し出力を30%にし何時でも動けるようにした

『それでは、私のビアンカを目印に集合』

成る程、立ったばかりの子供みたいだな

ふらふらしながら飛んでいる様をみてそう思った

一機、最初はふらふらしていたが感覚を掴んだのか出力30%のビアンカの限界速度でレイラ教官のビアンカまで着いた機体があった
俺はバイタルを確認する要領で名前を見た

《片瀬 真人》

成る程、いい意味で片瀬さんの弟か・・・初の宇宙でそれだけ出来れば十分だろう

ソレを見てか一機のビアンカが出力限界までいっきに上げた様で前にいたビアンカにぶつかってしまった

急いでぶつかったビアンカのパイロットのバイタルデータを確認しようとした

《リリー・ブッフホルン》

確認しようとしたが彼女が他のビアンカにぶつかった事でそれが玉突き事故の様に被害を増やしていく
その中で一機だけレイラ教官と初佳の遠隔制御範囲内から飛び出すビアンカがあった

『狛江!』

レイラ教官の声に言われる前に補足している

「わかっていきます!レイラ教官と初佳は他のオーバビスマシンをお願いします!」

俺は出力を80%まで上げ範囲から外れたビアンカを追いかける

そのビアンカは縦に回転しながら飛んでいる、ストラーダの重力推進器で制動をかけようにもソレをするにはもう一機オーバーヒートが必要だ

俺はレイラ教官にアンカーワイヤーを使用する事を伝える

「レイラ教官！一人であのビアンカの制動をかけるのは不可能です、アンカーワイヤーの使用に許可を！」

『緊急時だ！多少壊しても構わん！』

「了解！」

俺は許可を得たのと同時にアンカーワイヤーを回転するビアンカの重力推進器に狙いを定め、回転の時間を計算しアンカーワイヤーを発射する

《アンカーワイヤー固定》

固定したのを確認しワイヤーを絡ませ無い様にビアンカの回転に合わせてストラーダを動かす

ソレと同時にワイヤーを巻き距離を詰める

ビアンカとの距離が15mになった時点で両脇にある作業用アームを動かしビアンカの羽を掴む

その時やっと余裕が出来たのでパイロットを確認する

《ミア・グレンノース》

歓迎会の時会ったアリサの妹が

「ミアちゃん聞こえるかい？」

『狛江先輩！？助けてください！！』

顔に涙を浮かべながらそう言ってきた

「とりあえず落ち着いて、まずは制動をかけようか」

『どうやるかわかんないです！！』

どうやらパニックに陥っているらしい

今ストラダはビアンカの動きに合わせて回転運動を続けている

今のビアンカは出力30％に固定されているからストラダは25％の出力で回転と逆に進める

徐々に回転が緩やかになり回転が止まった

『しまゝえ ぜんばいありがとうございまゝす』

泣きながら喋っているのを何言っているか分らないが止まった事で安心したようだ

しかし止まったとはいえ現状ストラダの出力で押さえ込んでい

形だからレイラ教官の所まで運んで遠隔操作で出力を抑えて貰おう
レイラ教官の所まで運びレイラ教官が出力を下げるのと同時に俺も
出力を下げる
出力が0になり機体が停止した事を確認しアンカーワイヤーと作業
用アームを離れた

『今回の件はリリー・ブッフホルン、お前が招いた事だ、どうして
こうなったか分るか？』

レイラ教官が注意を促す、ただ注意するだけでは無く何が原因かを
認識させて同じ事が起きないようにする為に

『わ、私が無茶をしたから・・・です』

『なぜ無茶をした』

『一機のビアンカが私以上の速さでレイラ教官の所まで行ったから・
・・・』

それで自分も出来ると思ったか・・・地上のシュミレータをやって、
宇宙でも出来ると驕ったか・・・

『その結果がコレだ、いいかブッフホルン・・・コレを招いたのは
お前の過信だ、以後気をつける様に』

『・・・はい・・・すみませんでした』

コレは誰にでも言えるな、俺も気をつけなければ・・・な

『他の奴等もこの事をしつかり受け止め同じ事が無い様に・・・各機、機体とバイタルデータをチェック、問題がある場合は直ぐに報告するように』

幸いにも一人も怪我無く機体損傷も装甲板がへこむ程度ですんだ

そして演習を再開した、今度は各一機づつレイラ教官を目指す形に
変って

その後は問題も無く演習が終わり俺の役目は終わった

s i d e o u t

一つの過信は事故を生む

己の技量を見誤った者は負を生み出す

しかし先人が気付き、指摘する事でその負を無くす事が出来る

先人は見守り、
後を行く者は励む
そうして道は続いて行く

第二話く励む者、見守る者く

（後書き）

フェアリオンさん佐山さん感想ありがとうございます！

御読み頂きありがとうございます

えくそんなこんなで第二話です

なかなか上手く纏らずに何回も書きなおしましたが更新できほっとしている今日この頃・・・

それでは誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

第三話　人の営み（前書き）

という事で第3話です

短めとなりますがお楽しみ頂けたらと思います

第三話　人の営み

工事中のステルヴィア

しかし人が居る限りそれぞれの営みがある
各々の過ごす日々は

side 真也

今日は日曜日

学園も休みで俺は自室でくつろいでいた
部屋に流れる音楽はお気に入りジャズ
それを耳しながらコーヒーを飲む

本来なら初佳も来るはずだったのだが明日の演習の書類が終わらなかったらしく今日は来てい無い
しかし・・・初佳が書類を終わらせられないとは・・・きつとかなりの数があったに違いない
そんな事を考えていると突如聞こえてくる来客を示す音

《キンコーン》

「どうぞ」

最初は初佳かと思ったが連絡を受けて1時間、こんなに早く書類が終わると思えずチャイムの主を呼びいれた

「やあ、久しぶり」

声の主はミッションに行っていないはずの光太だった

「久しぶりだな光太、こっちに帰ってくるのは来週じゃなかったのか」

「うん、当初の予定より早く終わってね」

しかし光太よ、片瀬さんの所に行かなくていいのか
と疑問に思っているとそれに答えるように光太が言う

「本当は志麻ちゃんとデートでもしようかと思ったんだけど部屋に行ったら居なくてね」

なるほど、まあ俺も似た様な状況だから何もいえないが

「そついう真也も町田先輩は？今日は一緒じゃないの？」

と光太も気になったようで説明する

「ああ、初佳は仕事だ・・・書類が終わらなかったようだな」

そつすと光太呆けた顔をしていたが直ぐに言葉を発した

「へえ、町田先輩らしくも無いね」

「ああ、全くその通りだ」

そして俺は光太のミッションについて聞いてみる事にした

「そついえば今回のミッションはどんな内容だったんだ」

光太は少し困った顔をしていた

「ああ、無理にとは言わないが」

と俺は急いでそう言った

「別に機密事項にもなつてないし・・・うん、今回のミッションは太陽系外の惑星探査だったんだ、でも奇妙な事なんだけど太陽系外にあるエキセントリック・プラネットの光源が大きくなっていったんだ、詳細は分らずじまいだけどその観測データは宇宙局に転送して今回のミッションは終わりなんだ」

エキセントリック・プラネットと言うと太陽系外にある恒星の一つだ・・・その光源が大きくなっていると言うと超新星爆発の前兆か・

・・そうなるやハイドラスベータの災害と同じ事が起きかねないが、宇宙局が静観してる様だし・・・ここで考えても仕方無い

「聞く限りでは特段あわてる事では無さそうだな・・・仮に超新星爆発が起きたとしてもグレートミツシヨンの焼き回しだ・・・不安要素としては未だに全てのファウンデーションが工事中でありウルティマの開発が行われていない事か」

「うん、そうだね・・・難しい事は宇宙局の人達に任せて休日くらいゆっくりしようよ」

「それもそうだな、さて光太はコーヒーは？」

「もちろん飲むさ」

そうして光太との話は続いた

s i d e o u t

s i d e 志麻

私は今アリサと一緒にショッピングの最中

「ねえしーばん、このランジェリー可愛くない？」

薄いピンクをした下着を手にアリサが言ってくる

それは周りに花の刺繍もしてあってアリサの言う通り私も可愛いと思う

「うん！でもアリサはもうちょっと派手な奴でも大丈夫だと思うよ」

そう言つとアリサはいやらしく笑い

「なあゝに言つてんの、コレはしーばんの為に選んだの・・・で、どお？」

選んだって言っても・・・確かに可愛いし欲しい気がする

「うん・・・買おうかな」

「よし来た！じゃあ今度はしーぽんが選んでよ」

そうアリサに言われ私はアリサには赤色っぽいのが似合いそうだから・・・

そう思い手に取ったのはオレンジ色の下着

周りには風を模したような刺繍もありアリサに似合いそう

「コレなんてどうかな？」

そうアリサに聞く

「おおー！いいじゃん・・・値段も御手ごろだし、うん！それ買う」
なかなか気に入って貰えたようだ

そうして暫くショッピングを続けて会計を済ましお店を出た

3時間くらいの買い物を終えアリサと喫茶店に向かった

「およ？あそこに居るのは・・・」

アリサが誰かを見つけたようでその方向を見ると

「あ、町田先輩だ」

そこには町田先輩が居た

そして周りには真也くんの姿は無く一人のようだ

「町田先輩こんにちわ、今日は一人ですか？」

私は町田先輩に声を掛けた

「あら、こんにちわ片瀬さんにグレンノースさん・・・ええ、ちょっと学園に用があつてね、もう終つただけだ」

学園に用つて事は仕事関連かな・・・

そんな事を考えていると急にアリサが思いついた用に言い出す

「あ！町田先輩も一緒にどうですか？今から喫茶店に行くんですけど」

「ありがとう・・・でも遠慮するわ、喫茶店に行くくらいなら真也のコーヒーを飲みに行くわ」

確かに・・・真也くんのコーヒーはそこらにある喫茶店より美味しい

「それなら今から真也の部屋に行ってコーヒーをご馳走になりに行きませんか？」

アリサ、それは何か違う気がするけど

「貴女たちが構わないならいいわよ」

と町田先輩の許可が下り真也くんの部屋に行く事となった

道中話の中で町田先輩は

『朝に仕事って言って断りを入れたから行きにくくて』

と苦笑していた

私とアリサは荷物を部屋に置いてから三人で真也くんの部屋を目指した

暫く歩き真也くんの部屋の前に来た

私は呼び鈴を鳴らし返事を待った

『どうぞ』

真也くんの許可が下り部屋に入った

そこには真也君意外にもう一人

その顔は私の良く知る顔で

私の彼氏である光太くんがいた

「あー！ー！光太！帰ってきたの？」

そうアリサが叫んだ

でも光太くんが帰って来るのは来週のはず

「うん、ミッションが速く終ってね」

そう光太くんが話た

「光太くん！帰ってきてるんだったら連絡くらいしてくれれば良いのに！」

と私は思った事を叫んでしまった

「まあ落ち着け片瀬さん・・・光太は片瀬さんの部屋に行ったと言っていた」

真也くんにそう言われて少し落ち着いた

「でも、電話くらいしてくれてもいいと思う」

ちよつと拗ねた様に言う

「うん、僕はちゃんと電話したよ」

そう光太君が言った

私は急いで鞆の中の端末を調べた

《着信あり：3件 光太くん》

本当に電話をしていたようだ

何故気が付かなかったか気になり良く見ると
マナーモードになっていた

「うう・・・何で気が付かなかったんだろ」

私は少し落ち込んだ

「でもこうして会えた訳だし・・・これからゆっくり話そうよ」

光太くん・・・

「・・・うん」

私は短くそう言った

「これで一件落着か」

「そうみたいね」

そう真也くと町田先輩が言った

「さて初佳、仕事御疲れ様・・・さっき入れたばかりのコーヒーがあるが」

「勿論もらうわ」

向こうも話を始めている

「うがぁー！みなさんご馳走様！」

アリサが居た堪れなくなつたのか叫んで帰ろうとしてたけど

「まあアリサ、コーヒーでも飲んで落ち着いていけ」

真也くんの言葉でアリサがわなわな震える

「こんな空間で落ち着けるかー！！」

そう言つたアリサだけど結局最後まで私達に付き合つていた

side out

side 風祭技官

これがインフィニティーから送られてきた情報か

恒星エキセントリック・プラネットの光源拡大

コレが意味する事は超新星爆発の前兆か・・・あるいは

しかしこの恒星だけでは判断がつかない

エキセントリック・プラネット付近の惑星や他の星の観測データで比較しなければ

過去2年ほどのデータがあれば話の大筋が見えるというのに

「風祭技官、コーヒーをお持ちしました」

部下がコーヒーを持ってきたついでにある頼みごとをした

「わざわざありがとう、少し頼みたいんだが宇宙局に各観測所に過去2年のデータを送るようにと・・・後は狛江局長にも応援を要請しておいてくれ」

狛江局長は前回のミッションでも頼りになった

今回も少し知恵をかって貰う事になりそうだ

「分かりました、それでは失礼します」

さて・・・もしこの現象が超新星爆発の前兆意外と仮定して物事を考えなければな

コーヒーに口を着け少し頭の中を整理する

しかしなかなか考え纏らず頭を悩ませる

結果として上手く纏らず宇宙局から送られてくるデータと狛江局長を待つ形となりそうだ

「失礼します、宇宙局の方は一週間前後でデータを送ってくれるそうです。……狛江局長の方は研究が一段落してから向かうそうです」

狛江局長は研究から手が離せないか

それなら仕方無いな

とりあえず宇宙局からデータが送られるだけありがたい

少なくとも一週間は有る、その間に少しでも考えをまとめなければ

s i d e o u t

恒星の光源拡大

それが何を示すのか

そしてこれから何が起きようとしているのか

それは未だに分らない

しかし歩みを止めぬ限り道は続く

第三話　人の営み（後書き）

佐山さん感想ありがとうございます！

期間限定一日一更新第一弾です！

明日も無事更新できるか分かりませんが頑張って行きたいと思っています

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします！

第四話ゝ試験前対策ゝ

(前書き)

急いで執筆したので誤字脱字があるかも知れません
そして更に短い・・・

と言うことで第四話です、お楽しみ頂けたらと思います

第四話　試験前対策

各ファウンデーションの工事も順調に進んでいる
そしてもう直ぐ熱い季節がやってくる
しかし学生にとってはその前に試験が待ち受ける

side 真也

あと数ヶ月で合同体育祭か・・・楽しみだ
去年一昨年とファウンデーションの工事と宇宙学園の建設が間に合
わなくて行われなかったから白銀教官も前の様になるだろうな
しかし合同体育祭の前には中間期試験がある
普段の講義から出題されるであろうから俺は問題ないのだが

と考えていたところを邪魔するように声を掛けられる

「頼む！この通り！！」

そう言って手を合わせ拝む様に頼み込んでくるジョジョ

「今回の試験の結果次第で晶との命運が掛かってるんだ！」

ジヨジヨの話 요약すると今回の試験で下から50番目を抜け出さなきゃ別れると言う事らしい

栢山さんの事だからジヨジヨに発破かけているだけだろうけど

しかし栢山さんもしっかり切った事をする・・・そんな事を言われればジヨジヨもやるしかないからな

ここは少し協力するか

「分った、とりあえず放課後俺の部屋に來い」

そうジヨジヨに言う

「ありがとう！それじゃ後で！」

となんとも現金な態度である

まあ教える事は俺の復習にもなるし問題は無い

そして午後の講義が終わり自室でコーヒを飲みながらジヨジヨを待つ

《キンコーン》

呼び鈴がジヨジヨが來た事を知らせる

「開いてるよ」

そう声をかけドアからジヨジヨが入ってくる

「お願いします！」

そう言つて机にジヨジヨが向かう

「まずは、今日の講義でも出てきたカー・ニューマンの解の事を説明する・・・正式名称はカー・ニューマン・ブラックホール解、これは一般相対性理論のアインシュタイン方程式の解の一つだ・・・ここまでは知ってるよな」

と一応ジヨジヨに確認すると油汗をかきながら頷く

ここから分らないとテストの2割を落としかねないので更に説明を加える

「このカー・ニューマンの解は質量・角運動量・荷電の三つを持つブラックホール解として一般的相対性理論の理解に使われる・・・ここでカー・ニューマン計量式はこうなる」

俺は端末に式を広げる

「そして荷電が0の場合はカー解を再現し角運動量が0の場合はライスナー・ノルドシュトムの解を再現する・・・そして荷電、角運動量が共に0の場合はシュヴァルツシトンの解を再現する」

ジヨジヨの油汗の量が尋常では無い

「ここまでで分らない事は？」

ジヨジヨは此方を引き引きつつた顔でこう短く言った

「・・・全部」

この言葉を聞いた俺は多少のイラ立ちと頭が痛くなった

「いいかジヨジヨ・・・この解と説明は前回の講義内容を少し簡単に説明しているんだぞ・・・それじゃ続きだ」

そこからしばらくの間、前回の講義の復習が続いた

「さらにブラックホール脱毛定理では現実的なブラックホールは角運動量・質量・荷電の物理量のみを持つカー・ニューマン・ブラックホールに落ち着くと考えられている」

と4時間に渡り講義の説明をしたが・・・話の3割でも理解していれば良い方か・・・

時計を見ると針は21時を超えていた

「今日はこのぐらいにしておこう」

俺の言葉で始めた頃より少しやつれたジヨジヨは顔を上げた

「・・・ありがとう、真也・・・それじゃお休み」

そう言って部屋を出て行った

しかし今回の勉強では試験での成果は期待できないだろう
また明日・・・勉強する気があるならもう一度見てみよう

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

志
麻

試験まで一週間くらい
私は今アリサと試験勉強中

「あゝもう！わーかーんーなーいー！」

またアリサが騒ぎだした

「もう！私は整備科なのにどうしてブラックホールとかの事を勉強しなきゃいけない訳！」

確かにアリサの言う事も分るけど

「それにこんな事知らなくたって困らないのに！」

でもアリサ、これを言つと怒りそうだけど・・・

「でもアリサは今困っているよ」

アリサは一瞬呆けた表情をした
そして

「・・・ウガアーーーー！！！」

また叫びだした

そして叫び終わった所で真剣な表情で

「しーぽん・・・勉強教えて」

アリサはそう言ってきた

「しょうがないなあ」

そして私はアリサに教える事にした

しばらくしてアリサが思いついたように

「そつだ！お嬢と晶を呼ぼう！みんなで勉強すれば捗るし！」

そう言つてアリサは端末を取り出し電話をかけ始める

「あ、お嬢？そこに晶も居る？・・・そうそう、今しーばんと一緒に勉強してたんだけどお嬢達もどう？オツケー！それじゃあ飲み物用意しておくね」

アリサは電話を終え椅子に座り

先の電話の結果を話した

「お嬢たちこつち来るつて」

そつかやよいちゃんがいれば色々教えてくれるだろうし助かるなああ

「そついえば光太は良いよねえ！ミッションに行ってるから試験無いし」

アリサは光太くんの事を羨ましそうに言う

でも光太くんは帰ってきてから試験がある事を言う

「でもねアリサ・・・光太くんはこつちに戻ってきたら試験受けるんだよ」

そう言つとアリサは

「…………マジ？」

と信じられないと言つ顔でそう言つてきた

「うん、ミッションに行く前にそう言つてたから」

「うへー私には考えられないよ」

そうして少しアリサと話していると

《キンコーン》

チャイムがやよいちゃん達が来た事を知らせる

「どうぞー」

アリサが迎え入れる

「いらつしゃい」

私はコップに飲み物を淹れやよいちゃんと晶ちゃんに渡す

「勉強捗つてる？」

やよいちゃんの質問にアリサは

「もー絶望的……迅雷の奴、毎回難し過ぎ！……という訳で、お嬢！勉強教えて」

とアリサはやよいちゃんに頼みこむ

「いいわよ、それじゃあ今日の講義の所だけど」

そこからしばらく勉強会が続いた

そして不意にやよいちゃんが話す

「そういえばね、晶がこの間ジヨジヨ君に」

それを晶ちゃんが止めようとするけど

「ちょっとやよい!」

それでもやよいちゃんは続ける

「いいじゃない、それでね晶がジヨジヨ君の成績低下を防ぐ為に下がったら別れるって発破かけたのよ・・・愛よね」

晶ちゃんの顔が赤くなる

「だって、何時も馬鹿にされてるから・・・少しくらい発破かけないと」

晶ちゃんは恥ずかしそうに言う

「ほうほう、成る程・・・まさに愛だね」

「っ！アリサ！」

そこから恋話に発展し勉強どころでは無くなってしまった

結局、この日はその後勉強する事はなかった

s i d e o u t

日頃の成果を確かめる為に存在する試験
学生の大敵である試験に打ち勝つ事が出来るのか

第四話ゝ試験前対策ゝ

（後書き）

えゝそういうわけで一日一更新祝2話達成！

普段なら考えられない事ですが何とか間に合いました

明日とかが山場です、三日坊主にならない様に頑張ります！・・・
日曜日までですが・・・

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします！

第五話　メンバー決め（前書き）

一日一更新のつもりが日をまたいでしまった・・・そして短い
それでもお楽しみ頂けたらと思います

第五話　メンバー決め

中間期試験が終わり2年ぶりの合同体育祭が近づいてきた
学生達は日に日にやる気を見せていく

side 真也

俺は今、折原学長と話している

「いやすまないね、わざわざ呼び出してしまって」

学長は笑みを浮かべながらそう言った

いきなりの呼び出しで混乱しているであろう俺を落ち着かせる様な行動だ

「いえ、それでいたい何でしょうか」

俺は用件を聞こうとした

「うむ、君も知っての通り二ヶ月後には合同体育祭がある、そして栄えある事に開催地を各ファウンデーション合意でステルヴィアに決定した・・・そこで君と片瀬君、前回のアストロボール経験者に黄金時代の先駆けとなって欲しいと言うことだ」

学長の言葉は力強かった

それに2年間開催されなかった事で思いも大きくなっていたのだろう

「そこで、君にはアストロボールでの指揮を執って欲しいと思う、なに・・・多少の無茶な要望でもなるべく沿えるようにしよう」

なるほど・・・学長も本気か

「人選は此方で行っても？」

頭の中で候補を考えながら学長に聞く

「それは構わないが」

俺の頭の中では既に候補は決まっている

光太、それにお嬢とりんなちゃん

不安要素があるとなれば光太が本気を出すかどうか

「では変更は無いと思いますが自分と片瀬さん、音山君と藤沢さん、それと風祭さんのメンバーでの出場を考えています」

そして考えを学長に話した

すると学長は端末からデータを確認し

「成る程、良い人選だと思ふ彼等なら問題無いな」

後は錬度の問題か・・・経験者二人だけで勝てるほど甘くは無い

「あと一つだけ、明日以降の宇宙演習をアストロボールの訓練にする事は可能でしょうか」

学長は少し考え短く理由を聞いた

俺は直ぐに答えた

「はい、理由を上げるとしたら経験不足を補う為とチームワークの基礎を作ること・・・後は今上げた人物以上の実力者を探す為です」

納得した顔をした後、疑問を感じたのか学長は尋ねてきた

「しかしさつきは変更は無いと言っていたのに実力者を探すとはどういう意味かね」

俺は簡潔に答えた

「それは不安材料を無くす為です、音山君はしばしミッションに駆られる事があります、それが体育祭と重なら無いとも言い切れませ

ん・・・その為に探そうと思います、それに今上げた人物以上の実力者であればメンバーの変更も吝かではありません」

学長は頷き、納得したようだ

「君の考えは分った・・・メンバーの件については了承しよう、だが演習に関しては担当教官との話合いの結果としよう」

「分かりました、では教官からの許可を得次第に資料と共にお尋ねします・・・では失礼します。」

そう言つて俺は学園長室をでた

そして次に向かう所はレイラ教官や初佳の居る教官室
学園長室からさほど遠く無い距離にある教官室に着くまで5分と掛からなかった

俺は教官室の扉をノックし入室許可を待った

扉越しに入室の許可得て部屋に入った

「狛江か、どうしたんだ？自主訓練の許可か？」

レイラ教官は俺が予科の時の様に自主訓練の許可を求めてきたと思つたようだ

俺はレイラ教官の勘違いを改めるために話を切り出す

「失礼します、レイラ教官にお話がありまして・・・じつは先程学園長に呼ばれ2ヶ月後の合同体育祭で黄金時代の先駆けとなるよう激励を頂きました、そこでレイラ教官に御頼みしたい事は次回演習よりアストロボールの訓練に演習内容を変更して欲しいのです。学

長よりこの件に着いてはレイラ教官と話をするよう言われまして」

レイラ教官は少し考えたようだったが何時もの口調で話しだした

「次回の演習からのカリキュラム変更は難しいな・・・事が急なだけあって此方の組んでいた予定が狂ってしまう・・・2週間後からなら調整次第では可能だろうが」

やはり演習との兼ね合いで上手く時間が取れないようだ・・・しかし2週間後に始められるだけ良しとしよう

「では大変申し訳無いのですが演習予定の修正をお願いします。後チームについては自分と片瀬さん、音山君と藤沢さん、そして風祭さんを一つのチームに振り分ける様お願いします・・・学長には先のメンバーを代表にする胸を伝えてあるので・・・自分としても早くチームとして完成させたいので」

「分った・・・それじゃ後で変更後のカリキュラムデータを端末に送っておくから計画書を学長に届けるように」

「分かりました、ご迷惑をお掛けします」

「なに、アストロボールの訓練は他のカリキュラムに通じる所がある・・・そこまで手間では無いよ」

「そう言って頂けて何よりです、では失礼します。」

俺はそう言って部屋を出た

俺は自身が選んだチームメンバーに了承を得る為に自室に来て欲しい胸を端末に連絡した

s i d e o u t

s i d e 志麻

放課後、光太さんとデート中・・・今は映画を見終わってこれから何処に行くか相談中

「どうしょつか」

光太くんが聞いてくる

「それならこのままショッピングとかどうかな」

不意に鞆に入れた携帯が鳴る

それに気が付き端末を開くと真也くんからメールが届いていた
気が付くと光太くんも端末を開いていた

「真也くんから？」

光太くんを確認する

「うん、志麻ちゃんも？」

「それじゃあ内容も一緒だよな」

私は念の為光太くんを確認する

「18時に真也の部屋に・・・であつてる？」

私に着たメールの内容と一緒にだった

「うん、合ってる・・・それじゃあこのまま向かおうか」

今は17時30分、ちょっと早く着くくらいだけど平気だよな

「そつだね、行こう志麻ちゃん」

私と光太くんは手を繋ぎながら真也くんの部屋に向かった

しばらく歩き真也くんの部屋に着いた
そして呼び鈴を鳴らし返事を待つ

「開いてるよ」

扉越しに了解を得て部屋に入る

「「おじゃまします」」

そう言つて中に入ると真也君意外にやよいちゃんとりんなちゃんが
居た

「二人とも真也くんに呼ばれたの？」

と私は二人に尋ねた

「ええ、重要な事らしいから速めに着ちゃった」

やよいちゃんと話て居ると真也くんがコーヒーを持ってきて私達を
ソファーに座るよう促した

「早速で悪いのだが今日集つてもらつたのは光太達にアストロボー
ルでの選手を頼みたいからだ」

そっか、もうそんな時期かぁ・・・

「ちなみに片瀬さんと俺は経験者として出場が決まっている、そこ

で残りのメンバーを光太達にと思って声を掛けたわけだが」

え！？今回こそはマニピレーターアートに出ようと思ったのに・
・

「片瀬さん、プログラム次第では他の競技も出られるから・・・希望があれば掛け合うから出たい競技を後で教えて欲しい」

それなら頑張る

「それで、後2ヶ月で合同体育祭がある事は知っていると思う・・・そこで俺は学長からステルヴィアの黄金時代の先駆けとなって欲しいと言われている・・・もちろん花形競技のアストロボールで、俺としては是非ともアストロボールのチームに入って欲しいのだが・・・どうだろう」

真也くんが皆の顔を見回して確認する

「もちろん！それに真也もしーぽんもでるんでしょ！」

りんなちゃんが元気よく答える

「そうね、期待に応えられるか分らないけど参加するわ」

とやよいちゃんが答える

しかし光太くんは黙っている
すると真也くんは

「ミッションの事は心配するな・・・光太はどうしたい」

すると光太くんは口を開いた

「そうだね・・・是非参加させて欲しいかな」

と光太くんも参加する事になった

「ありがとう皆・・・光太のミツシヨンの件は俺が学長に話してお
く、近々演習の内容もアストロボールに変更される予定だ、それで
はこのチームで演習をする事なる・・・簡単に言えばチームワーク
を高める為だ」

と言うことはもう大体の話は決まってるって事なのかな

「そこで先にポジションを決めたいと思う・・・まず片瀬さんとり
んなちゃんは攻撃、お嬢と光太は遊撃、そして俺がゴールを守る」

「そうね、そのポジションで良いと思うわ」

「さっすが真也！わかってるう！」

「僕もソレに賛成」

みんな納得しているようだ

「私も頑張るね」

みんなの了承を得られほつとした様子で真也くんは次の話に移った

「ありがとう、では細かい所作戦は演習をえて決めていこうと思う・
・・・時間も遅くなってきたし今日はこの辺にしておこう」

真也くんの言葉で各々が挨拶をして自室にむかって行った
二年間開催されなかった体育祭
その分きつとみんな気合が入ってるんだろっな

とそんな事を考えながら帰路に着いた

s i d e o u t

アストロボールのメンバーも決まり体育祭まで後2ヶ月
学生達は日頃の成果を見せる為、より一層勉学に励んでいた
成果を見せる時は近い

第五話ゝメンバー決めゝ（後書き）

フェアリオンさん感想ありがとうございます！

目標であった一日一更新第3話・・・のはずでした

大体1時間オーバーで更新だけど・・・頑張った結果がコレです

明日も更新する予定ではありますがまた日を跨いでしまつやも知れませんが、頑張って執筆します！

誤字脱字、感想等ありましたらよろしく願います

第六話ゝ訓練ゝ（前書き）

この小説を待っていてくれた人がどのくらい居るのか分かりませんが大変お待たせ致しました

次回より通常通り毎週日曜更新を再開していきます
いままで更新できずに申し訳ありませんでした

大変短いですがお楽しみ頂けたらと思います

第六話　訓練

合同体育祭まで後2週間

学園内の熱気は日々上昇を見せる

そして・・・

side 真也

合同体育祭まで後2週間・・・学長に光太の件、合同体育祭までの光太に任せるミッションに付いて具申し、その意見が通り光太を含めた俺が考えたベストメンバーでアストロボウルに望む事ができる今はそのアストロボールのメンバーで訓練の真っ最中だ

「片瀬さん、前回のアストロボールの様に障害物のトレースはできるかい？」

通信で片瀬さんに確認する

『少し時間をくれれば大丈夫だよ』

笑顔でそう答える片瀬さん、しかし俺には少し上手く行かないのは・・・そういう考えがあった

他のファウンデーションも前回の片瀬さんの快進撃を見ているのだからなんらかの対策を講じてくる、相手も片瀬さんがチームの要だと思っっているだろうし

『そんな難しい顔をしちゃだめよ、それにしーぽんだけじゃなく私やりんなちゃんに、それに光太君もいるんだから大丈夫よ』

藤沢さんの言葉で少し気持ちが楽になった

そして俺は、ある秘策を練っていた・・・

それは・・・

s i d e o u t

side 志麻

さつき真也くんに言われた二年前の障害物のトレース、正直前回の時は私に誰も着いてなくて処理する時間があつたから・・・今回もその様になればプログラムを組む時間があるはず・・・でも

『そんな難しい顔をしちゃだめよ、それにしーぽんだけじゃなく私やりんなちゃんに、それに光太君もいるんだから大丈夫よ』

やよいちゃんが真也くんと言った言葉・・・それは私にも言ってくれていると思った

『志麻ちゃん、皆で頑張ろうね』

光太くんの言葉で楽になった

そつだよね、皆で頑張ればいいんだよね

私はプログラムの精度を上げる為に皆にある頼みをした
その内容は・・・

『要するに、俺達が仮想敵チームになってしーぽんのプログラムを
打つのを妨害しろってことか』

要約するとそういう事になるかな

『よし、じゃあ光太と片瀬さん、俺、藤沢さん、りんなちゃん、光
太、片瀬さんに対して攻撃を仕掛ける・・・1分後に模擬戦を始め
るから準備をよろしく』

よし・・・この人数でプログラムを組めないと問題外だね

『志麻ちゃん、まずはこっちがボールをキープするけどどっちがボ
ールを持っておく?』

「私はプログラムを組む事に集中したいから光太くんお願い」

そして時間になり模擬戦が始まった

s i d e o u t

side 真也

模擬戦が始まり俺は藤沢さんとりんなちゃんを片瀬さんをマークさせ俺は光太をマークした
何故俺が二人も片瀬さんをマークさせたかというと、片瀬さんの弱点をつくためである

宇宙空間は360度道がある状態である・・・が、事アストロボールでは限られたフィールドと障害物、その二つを上手く使い光太の進路を制限していく

《前方に障害物3》

DLSに表示される情報を元に光太の進路を計算し予測進路を絞り道を固定する

光太もそれに気が付いたのか急停止をし進路を変更してきた俺は急いで圧力ガスを使った急旋回をし光太を追跡する

DLSの情報に片瀬さんと藤沢さん達の情報が移る

二人で完全に片瀬さんをはさみこみ行動をふさいでいた

コレが片瀬さんの弱点、行動を制限しボールを回せない様にして片

瀬さんにボールを持たせないようにする
コレだけで片瀬さんの脅威が格段に下がる

光太も片瀬さんにボールを渡したいようだが片瀬さんにマークがついている為か行動を起こせずにいた

s i d e o u t

s i d e 志麻

模擬戦をやり始めてからりんなちゃんとやよいちゃんのマークがず
っとついてる

プログラム自体は完成してもこれじゃあボールがもらえない・・・
こういう時は

そうだ！このプログラムを流用して光太君にパスを出す位置を指示
して二人に予測されないようにすれば

私は急いで光太くんに計算したポイントを送った

『ありがとう志麻ちゃん！タイミングは3秒後で！！』

光太くんも真也くんのマークが振り切れずに焦っているようだった
でも真也くんも凄い・・・完全に一人で抑えているんだから

『志麻ちゃん！いくよ！！』

その言葉と共にパスをされる

計算上後ろに来るので私は急旋回をして一瞬、二人の隙についてボールをキープするそしてシュートを打とうとしたら

二人が私の機体を中心に回って私がシュートさせ難くしていた

何とかプログラムによる予測してコースにシュートを放った

いつの間にかゴールに戻っていた真也くんがボールを止めに掛かる
反重力スティックには当たらなかったけど、真也くんの機体に当たりゴールから外れてしまった

s i d e o u t

訓練の時間を終え

いよいよ合同体育祭までの時間を秒読みとするなか
学生達は日頃の成果を出すことは出来るのだろうか

第六話　訓練（後書き）

久しぶりに筆を取り、筆が進まない現状を感じ悲しくなりました
ですがこれから執筆するにつれて感覚を取り戻すと共に作品の出来
を高める努力をして行く所存です

最後になりますが、今までお待ち頂いた方、大変申し訳ありません
でした

この投稿より通常通り更新していきたいと思えます

第七話〜合同体育祭・前編〜（前書き）

え〜日曜日に更新したはずなのに、更新できていなくて焦って今更新しました・・・

日曜日に楽しみにしていた方々、大変申し訳ありません！

それではリハビリ中の作者ですが、お楽しみいただけたらと思います
す

第七話　合同体育祭・前編

合同体育祭も始まり花形競技のアストロボールを待つばかり
その熱気は止まる事をしらない

side 真也

もうすぐアストロボールが始まる
時間を確認し俺は選手待機室に向かう
光太達と打ち合わせする為に

「粕江くん」

待機室に向かう途中にケント先輩に声を掛けられた

「どうしましたか？ ケント先輩」

「いや、これからアストロボールが始まるが、勝算の程を聞きたいね」

なるほど、こういう行事はケント先輩も気になるか

「大丈夫ですよ、何も負ける為に行く訳では無いのですから」

俺がそういうと

「だそうですよ、白銀教官」

ケント先輩の言葉で後ろを振り向くと仁王立ちした白銀教官がいた
そして俺の肩をつかみ

「その意気だ！ 絶対に負けるんじゃないぞ！！」

とそういつて離れていった

「というわけで、頑張つて」

その言葉を残し通路には俺だけが残った

白銀教官も久しぶりの合同体育祭に熱が入っていたようだ

俺は当初の目的地に行くことにした

移動する事数分、待機室には皆の顔があった

モニターを囲むように皆が集まっていた、

「おまたせ」

俺は短くそういった

「もぉー！真也遅いよー！！」

りんなちゃんにそう言われ謝りながらモニターの方に行く

「それじゃあ簡単なフォーメーションの確認をしようか」

モニターに格機体が表示される、それをドラッグし、動かして配置を調整する

「片瀬さん、りんなちゃんが攻撃、そして藤沢さん、光太が遊撃、俺が守備・・・攻撃方法は攻撃二人のツートップ、遊撃は二人は機会があればゴールを狙ってくれて構わない、ここまでは問題ないかな」

俺の言葉に皆が頷く

それを確認し俺は言葉を続けた

「俺はゴールを守るがハーフラインギリギリ・・・まあ相手の配置にもよるが出て行く予定だ、無理だと感じた場合は一回戻しても構わないからな」

そして俺達は細かい内容を確認しそして開始の放送を待つ

『さあ、二年の時を経て、熱い季節がやってきた！ジエネシスミ

ッションより着工した格ファウンデーションからこの戦いの舞台！
ステルヴィアに集まってきた選手の皆さん！観客の皆さん！ついに
この合同体育際の花形競技！アストロボールが始まります！放送は
ステルヴィア学園放送部美人部長のアリサ・グレンノースと」

『花を愛でるのが好き、ピエール・タキダです』

相変わらず放送はあの二人か

『そして解説はリチャード・ジェームズ主任教授とカール・ヒュッ
ター教官でお送りします』

アリサとピエールの放送が始まり俺達は会場の方へ足を運んだ

s i d e o u t

s i d e 志麻

アリサの放送を聞いて移動した私達は第一試合のエルサントとの戦いの準備をしていた

コックピットに入り各数値を確認する

よし！頑張るぞ

『それでは選手の入場です！第一試合は我がステルヴィア対、エルサントの試合になります！フィールド展開後選手の入場となります！今しばらくお待ちください！』

アリサのアナウンスが試合の時間が近い事を知らせる

『二年振りの合同体育祭という事もあって数多くの報道陣も詰め寄っています！そしてこの熱気！さすが花形競技のアストロボールといったところでしょ！つと、フィールドの準備が整いました！それでは選手の方はフィールドの方へ！』

アリサの言葉で私達は格納庫からケイティを出し、フィールドへ入場した

『やって参りましたステルヴィアの選手達！オレンジ色のケイティを駆るのは二年前の奇跡の退場娘！そしてミラクルシューター片瀬志麻！』

ちょ！なんで最初に退場娘っていうの！？

『今回のステルヴィアのメンバーをどう思いますか？リチャード教授』

『そうですね・・・今回はジェネシスミッションでの参加者である狛江君、音山君、それに片瀬さんの三人は相手の方も気を抜けないでしょうなあ・・・ヒュッター教授はどう思われますかな』

『私は、リチャード主任教授がおっしゃった通り件の三人に気を取られては風祭さんや藤沢さんに足を掬われると思いますね、その二人もジェネシスミッションに参加してもおかしくない腕の持ち主ですからな』

『なるほど・・・解説のお二人でした！それでは試合の方を始め
ていきたいと思います！』

アリスの声で会場が盛り上がる

『片瀬さん今回はプログラムは組めたら組んでみてくれ、試合での
感覚をつかむんだ』

真也くんから声を掛けられる

「うん、やってみる！」

私も皆の期待に応えられるようにがんばらなきゃ

『りんなちゃんはどうどん攻めて相手にプレッシャーを与えて、遊
撃二人は攻撃二人をサポート、ボール保持が難しくなったらボール
を下げておかまわない、堅実に行こう』

『りょくかい！』『ええ、任せて』

各々が返事をしていよいよ試合が始まる

『それでは試合開始です！最初はステルヴィアボールです！』

アリスの言つとおり審判機の放ったボールは光太くんが確保していた

光太くんがりんなちゃんにパスを出し一気に攻めに入る

私はその間にプログラムを組む

私はそれに集中していた

『志麻ちゃん！パス！！！！』

「え！？あ、はい！！」

光太くんからパスを回され私は攻めに行こうとした、プログラムの完成まであと少し！

私はシュートを撃とうとしたが敵のマークがきつくそれが出来ずにいた

『片瀬さん！こっちに！！』

「真也くん！？」

真也くんが相手がすぐにいけない位置まできてくれた

「はい！パス！」

私はパスを回した

『その間にプログラムを完成させて！！』

私はその言葉を聞いてプログラムの完成を急いだ

そうして、私のプログラムが完成した事を伝えた

『皆！お待たせ！プログラム完成したよ！！』

『よし！いったんりんなちゃんにボールを回して片瀬さんのマークを薄くするんだ！』

真也君の指示が飛ぶ

『りんなちゃんが敵を抜けない様なら藤沢さんか光太にボール回してそこから勝負だ』

りんなちゃんがゴール前まで敵をかわしつつ敵を引き付けている
そこでやよいちゃん、光太くんへとパスを繋ぎ

『志麻ちゃん！』

私のところまでボールがきた！

「よーし！やるぞー！」

私はプログラムにより算出した障害物に当てながら相手をかわしてゴールまで運んでいく

最後に一度ゴール前から戻るような軌道を算出しフェイントをかけまったく反対側にボールを運ぶ

そして

『ゴーーーーーール！先制点はステルヴィア！出ましたしーぽんの十八番！ミラクルシュートです！！』

『今のは上手いですなあ、ゴール手前の障害物に当ててのまったく反対側へボールを持っていく、エルサントのゴールキーパーはフェイントに見事に引っかけてしまいましたね』

よし！まず一点この調子で頑張るぞ！！

s i d e
o u t

見事エルサントを下したステルヴィアチーム

こうして花形競技でもあるアストロボールは始まり、会場の熱気は増すばかり

そして明日、オデッセイとの決勝を控えチームのメンバーは英気を養う

第七話〈合同体育祭・前編〉（後書き）

まだまだ感覚を取り戻せていない作者です

今回出社まで小説でも読もうかと思っただけで開いたら更新日がおかしい事に気が付き急いで上げたしいです

今だ感覚を取り戻せませんが頑張っただけ執筆活動を続けていきたいと思っただけです。

いつも通り日曜更新の予定で執筆していきます、今回は本当に申し訳ないです。

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7561s/>

宇宙のステルヴィアの二期を考えてみた

2011年8月4日19時57分発行